

蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介編

『引揚・追放・残留』

——戦後国際民族移動の比較研究——

安岡健一

結論から書くと、本書は、第二次大戦後における人の移動に関する今後の研究上の論点を規定する重要な成果である。編者の一人である蘭は、この間、大規模な科学研究費プロジェクトを主宰し、日本を中心とする人の移動の研究を牽引してきた。とりわけ戦時期における国策移民と戦後の人口移動に関して『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不二出版、二〇〇八年）や『帝国以後の人の移動』（勉誠出版、二〇一三年）といった浩瀚な編著書をはじめとする多くの成果を送り出してきた。これらの蓄積を踏まえて刊行された本書は、東アジアの引揚の実態をヨーロッパと比較してその連環を解明した、引揚に関する「グローバル・スタディーズ」の名にふさわしい達成である。

第二次大戦の終結時には台湾や朝鮮をはじめとする帝国日本の勢力圏に三五〇万人以上いた在外日本人―軍関係者を含めると約七〇〇万人が短期間に引揚げてくるという事象は広く知られている。それではこの現象は、いかなる世界的文脈で理解するべきなのか。まず同時代における動向として一五〇〇万人以上のドイツ人の東欧からの「追放」がある。そして、歴史的な縦軸として、

第一次大戦後に多民族からなる帝国が瓦解する過程でギリシャ―トルコ間で実施された「住民交換」から、第二次大戦後の植民地帝国の解体による脱植民地化にいたる、均質な国民からなる国家の創出を目指した動きがある。引揚をこれら二つの動きの線上に捉え返してみると、戦後東アジアの経験はどのような姿を私たちの前に表すだろうか。以下では、まず多岐にわたる本書の内容を要約し、その後に本書の意義について述べたい。

本書は、全四部から構成されている。まず第一部は引揚を理解するために必要な補助線として、引揚・追放・残留という本書の設定した対象と民族マイノリティ問題との結びつきが提示される。つづく第二部では、欧米諸国が経験した、植民地の独立に伴う引揚や難民問題へと対象がより大きく広げられる。第三部では日本国内の個別地域に即した引揚をめぐる事例研究がなされ、最後の第四部では日本帝国圏として帝国の崩壊によって「日本」ではなくなった地域と日本との間での人の移動と残留とが取り上げられる。以下、各章を順に紹介する。

蘭信三による第一章「引揚・追放・残留と民族マイノリティ問題」は総論として本書の問題構成を示すものである。引揚の問題と国民国家内の民族マイノリティ問題が密接に結びつくことを、ソ連を含むヨーロッパ、東アジアの諸事例を挙げながら示した。その検討に基づき、民族マイノリティ問題を論じる際に、国際的な視野に基づく多面的把握が必要であると提起する。

第二章、吉川元「戦争と民族強制移動」は、近代国民国家におけるマイノリティのあゆみのなかで引揚をどのように位置づける

かを提示した。吉川によると、二〇世紀には、第一次大戦後、第二次大戦後、冷戦後と、マイノリティと国家の関係をめぐって大きな画期が三つある。このうち前二者について、国家によるマイノリティ対策の類型である排除・保護・共生がどのように見られるかが示された。吉川の言葉を引くと、戦後冷戦期は「民族問題を封印」した時代である。この封印されたものが冷戦後どのように解き放たれてきたかは、我々が今日直面する「歴史問題」と直結しており、この問題のアクチュアリティを示すものである。

続く第三章で川喜田敦子は「第二次大戦後の人口移動」として、ヨーロッパとアジアにおける戦後人口移動を左右した連合国側、とくにアメリカ側の構想がいかに決定されていたのかを示した。アメリカが、ギリシャ・トルコ間の人口移動などを参照しながら、ヨーロッパとアジアでの戦後処理を構想してきた経緯が、戦後に形成された国際秩序を理解するうえで必須の要素であることが、説得的に示された。

第二部の冒頭となる第四章で松浦雄介は「フランス植民地帝国崩壊と人の移動」と題し、まずインドシナやチュニジア、モロッコなどの北アフリカ諸国やサハラ以南地域からのフランス人の引揚を総括し、フランス帝国の解体に伴う引揚の多様性を示した。そのなかで特異な地域を占めたのが、北アフリカのアルジェリアである。アルジェリアから引揚げてきたフランス人および新たにアルジェリアを離れてフランスへとわたった対仏協力者たちをめぐって、本国ではどのような政治的・社会的な動きがあったのかを論じた。またその引揚に際して、宗主国―植民地関係にとどまらない離散的な移動が見られたことも指摘している。

西脇靖洋は第五章「ポルトガル帝国の崩壊と引揚」として、一九七〇年代に独裁政権が倒されたことにより、次々と独立したアングラやモザンビークなどのポルトガル領南アフリカ植民地の事例を扱った。一五世紀以来のアフリカ入植の経緯から、一九五〇年代にアフリカへの移動が活発化した社会状況、独立後の引揚が旧宗主国・ポルトガル社会に及ぼした影響までを説明している。

第六章の佐原彩子は「難民支援戦略の源流」として、「難民」の定義がヨーロッパに地理的に限定され、アジアが除外されてきたと指摘し、アジアの難民が難民として扱われるに至る経緯を問い直した。主にジュネーブ条約（一九五四年）以後の北部ベトナムから南部ベトナムへの八〇万人におよぶ人の移動に対するアメリカからの介入を事例に、国際関係や民間団体の動きを中心に論じた。この介入は「反共」という冷戦期の重要な政治目標と深く連動しており、アメリカ社会のあり方も変えていった。

第三部の日本における事例は、いずれも研究方法としてオーラル・ヒストリーを活用している点が共通する。まず山本めゆが「性暴力被害者の帰還」として、戦後引揚の際になされた性暴力被害者に対する事実上の強制墮胎を取り上げ、それが、検疫体制の一環として実施された実態に注目した。本件については旧京城帝国大学関係者による活動が注目を集めてきたが、山本は九州帝国大学関係者の活動にも注目し、同じ医療救護事業であっても、参加者により捉え方が異なること、さらに異なる捉え方に対応するように、墮胎の対象となった「児」がどのように見えたのか——その胎児たちは「青い目」だったのか、「なんの子どもとかわかんない」のか——さえも異なってくる、という「人種化」さ

れた記憶のあり方に踏み込んだ。

第八章の坂田勝彦は、引揚者が集う「トボス」として炭鉱に注目する。「引揚者と戦後」と題して、戦時強制動員による朝鮮人労働者が一斉に帰還するのと同時に引揚者が流入してくる、複数の移動が交差する場として炭鉱を捉え返した。引揚者たちが集い、労働運動などにかかわったことを通じてその場に影響を与えたこと、とりわけ炭鉱を去る者と定着した者の語りから、引揚者が戦後の炭鉱にいかに関わったかを論じた。評者は戦後開拓地を人の移動が交差する場として捉えた（安岡健一「『他者』たちの農業史」京都大学学術出版会、二〇一四年）が、炭鉱も、まさにそうした現場であった。傾斜生産方式にみられるように、戦後復興期の重要な場である炭鉱を捉える新たな視座が示された。

第九章で、野入直美は沖繩における台湾引揚者に着目した。

「引揚エリート」とは誰か」と問いをたてて、戦後の沖繩社会で台湾経験を「資源」として復興を担い、層として確認できる社会上昇を果たした存在を描いた（復帰時の琉球政府主席であり初代県知事である屋良朝苗も台湾引揚者であった）。とくに戦後の沖繩における放送事業にかかわった川平朝申（かわへいあさひ）の活動に注目し、従来の研究よりも引揚者の能動性を強調した。

第四部で、崔徳孝は第十章「帝国後の人の移動と旧宗主国・植民地間の相互作用」として、戦後における日本社会と朝鮮半島社会の変容を考える際、人の移動は単なる帝国崩壊に附随する現象としてだけでなく、その人の流れ自体が生み出した「相互作用」に注目すべきだとする。日本へ引き揚げた在朝日本人の言葉が、在日朝鮮人への敵意を醸成し、祖国へ帰還した朝鮮人の経験が、

在朝日本人に対する「責任」を問うことにつながる動的な様子が具体的に描かれた。さらにそれは“New Imperial History”など英語圏での研究動向に加え、アメリカ国務省のディーン・アチン文書など一次資料によって、構造的に位置づけられている。

李淵植は第十一章「韓国における戦後人口移動と引揚者の初期定着」で、日本と韓国との比較は難しい課題であるとしたうえで、戦後人口移動における軍関係者と民間人の捉え方・区分の相違や残留形態の違い、そしてとりわけ南北間の冷戦に起因する人の移動について指摘している。朝鮮戦争期に北部から南部へと移動した「越南民」と呼ばれる人に匹敵する数が、「初期越南民」として解放直後から朝鮮戦争以前に移動しており、その中には高学歴の有力者層も多く含まれていた。日本からの引揚者は、「二等国民」としてのステイグマ（二八六頁）に苦しめられ、定着策として実施された帰農斡旋政策は目標には十分届かなかった。

第十二章「残留の比較史」で、中山大將はサハリンと中国東北部での残留日本人のあり方、また社会的な問題化のされ方について比較した。近年の研究で、サハリン残留日本人について蓄積が増してきたものの、他の地域と比較されることは少なかった。中山は「日ソ戦争」という軸を入れることにより、両地域を架橋する。そこからソ連と中国という社会主義国家と戦後日本との関係など、社会主義経験を問いつつ必要を提起した。

最終章では、編者の川喜田による、本書全体の総括と今後の課題が示されている。とくに川喜田が強調するのは国民国家の語りの相対化と、脱植民地化の比較検討である。「実証的な比較研究」との言葉に込められたのは、戦後人口移動の捉え方そのものに対する

する力強い問題提起である。

引揚研究において、研究状況の説明として、これまで十分に取
り組まれてこなかったと整理される場合もあったが、そうした段
階は完全に終わったと考える。もちろん今後も、研究が十分でな
い対象に関する個別分析は必要であるが、この間に積み重ねられ
てきた各地を対象とする研究成果が結び付けられたことで、帝国
日本の崩壊に伴う大規模な人口移動は、近代国民国家の歴史と戦
後国際体制の形成という激動の重なるところに生み出された産物
であるという見方が説得的に提示された。

本書の内容からすれば、日本側の事例として基本的な事項を補
う必要はあるかもしれないが、英訳され、国際的な学術界に提起
されるべきであろう。ヨーロッパとアジアとの単なる対比に留ま
らない、具体的な連関のもとに両者を把握する試みは、国境を超
えて有用に違いない。評者もかつて、マーク・マゾワの提起
(池田年穂訳『国連と帝国』慶應義塾大学出版会、二〇一五年)
を参照し、ヨーロッパと帝国日本との比較可能性について言及し
たことがある(『土地所有と民族問題』『立命館言語文化研究』二
八巻三号、二〇一七年)が、それは単なる類推に過ぎず、本書で
はアメリカの政策決定過程を実証的に解明したローリー・ワット
の業績(Watt, Lori (2017) "The Disposition of Japanese
Civilians: American Wartime Planning for the Colonial
Japanese", *Diplomatic History*, Vol. 41, No. 2.)を手掛かりにでき
たことで、両地域の連関は、もはや前提として踏まえられなけれ
ばならないものとなった。

また、本書は構成においても優れている。専門性の高い共著は
ともすれば、各章の連関が深められず、あるいは総括が欠落して
いることで一冊の書籍として不足を感じることがある。評者自身
他でそのような書評をしたことがあるが、これは言うは易くとい
うものであり、自分の参加した共同研究でも不十分な場合もある。
しかし、本書では、各著者による相互参照も随所にみられ、編者
らによる問題提起と総括とのバランスも共同研究の成果物として
非常に良質なものとなっている。

それぞれの章で提起された問題が交差するところから浮かび上
がってくる論点として興味深かった点を三点あげたい。

第一に、移動する人の階層・能力に関わる注目である。有力者
や良質な労働者を生み出すベトナムのトンキン・デルタ(第六
章)、炭鉱で争議の活動家として重要な役割を果たすことで定着
する引揚者(第八章)、沖縄の「引揚エリート」(九章)、朝鮮半
島の「高学歴有力者集団」(十一章)などで様々な角度から移動
する人のキャリアと能力に関する言及がある。行政官や企業人
についてはこれまでの研究でも指摘されてきたが、第七章で提起さ
れたジェンダーの問題に加えて、労働そのものが帯びる能力と移
動性との関係への注目は、アクチュアリティを持つ論点である。
また、評者がこれまで研究した事例と対比すると、引揚者が自ら
の経験のある種の「資源」とし「エリート」として定着しえた沖
縄社会の戦後史からは、沖縄戦によって失われた命の規模の大き
さも想像せざるを得なかった。

第二に、軍と民の区分とその記憶のされ方の問題である。李に
よれば、戦後韓国では復員と引揚は厳密に区分されず「植民地統

治と強制動員の被害者の母国帰還」としてひとまとめに取り扱われてきたが、日本では分けて扱う傾向が強いとして対比している。他方、川喜田は、戦後日本と西ドイツにおいて、政治問題化の程度こそ異なるものの、引揚経験は戦後の「苦労体験」として、似通った語りのパターンが創り出されたとする。さらに松浦によるフランスでの記憶をめぐる政治的動向を参照してゆくと、日本における民間人の戦争犠牲対策の性格も、より明瞭になりそう。引揚者たちの在外財産の補償をめぐる要求が、戦争の犠牲は国民が等しく受忍しなければならない犠牲とする「国民受忍論」によって退けられたことは、空襲による犠牲をはじめ日本におけるさまざまな戦争犠牲に対する補償策に影響を与えてきた。国家補償の実態と記憶のされ方の両面から国際比較が必要となるだろう。

第三に、中山が提起した社会主義経験の再検証という論点に関連する、土地問題を中心とした財産の問題である。李が「理念浄化」（二七八頁）という印象的な言葉を提示しているが、本書で取り上げられる移動には、冷戦期における社会主義をめぐる対立が色濃く反映されており、そこには私有財産の問題が大きく関わっている。戦後社会主義圏の拡大は土地国有化とその後の段階的な農業集団化を伴い、そこで変化した土地と人間との関係は無視できない重みをもつ。東ドイツに流入した難民化した人びとの受容や、「共和国逃亡」について詳細に明らかにした足立芳宏『東ドイツ農村の社会史』（京都大学学術出版会、二〇一一年）と交差する領域は小さくないはずである。秩序の安定（Resettlement）が、さまざまな体制転換に伴う混乱で流亡する人びとへの今日的な対策としても重要であることを考えると、歴史的にこ

の経験を見直すことは大きな意味がある。蘭も指摘するように在日朝鮮人の帰還の際の財産制限は、戦後日本への在留に大きく影響を与えてきたが、実際に持ち帰られた財産をめぐってどのような混乱が生じたかを捉えた李の分析（二八七頁）は、この時代における財産の持つ意味をリアルに描き出した。

本書では、日本の帝国崩壊過程に伴う引揚を、比較的短期のものとする。これ自体は、国際的な視点からすると妥当であり、異論はない。だが、ここに関連業績として、戦後日本社会で長く続いた引揚の経験を補足することで、読者はより立体的な歴史像を得るだろう。佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、二〇二〇年）は、引揚者たちが戦後にどのような組織化を図ってきたのかを当事者たちの刊行物と聞き取りにより詳細に明らかにし、また、細谷亨は満洲開拓の現地と送元元のつながりを戦時・戦後にかけて詳細に描いた（『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』有志舎、二〇一九年）。さらに、戦後の夜間学校など教育現場でも中国帰国者の受入に際して「引揚者教育」の語が用いられていた（例えば、太田知恵子「雨ふりお月さん」教育史料出版会、一九八三年は、東京都夜間中学校研究会のなかに引揚者教育研究部があったとする）。戦後日本史の中の引揚者のあり方は、なお一層の探求を必要としている。

本書は引揚に集中したことで、新たなものの見方を可能にした。そこから、前後する事象につなげることもできそうである。

本書による問題提起を評者なりに言い換えると、「引揚」という同時代の言葉であり、資料に出てくる用語が、ともすれば戦後

人口移動の意義を狭い日本の範囲へと押し込めてしまう「日本化」とも言える機能を果たしていることを実証的に乗り越えることではなかったか。この点に関連し、本書でも頻出する「Displaced Person」という存在に当てはめてみれば、戦後の移動のみならず戦時中の「避難民」も含める必要はないだろうか。

「疎開」もまた、「日本化」から解き放たれる必要がある経験である。疎開は短い期間ではあったが、極めて大規模な人の移動である。ところが、「疎開」という軍事用語——攻撃的な動作を意味する——を当てはめることで、この巨大な移動の経験と比較可能性が見過ごされている面がある。また、「疎開」が許されなかった人、たとえば戦時下日本に暮らし、厳密な監視体制下に置かれた華僑の存在は、本書で取り上げられた存在からすると数的には「けた違い」に少ないかもしれないが、移動と権力との関係を考えるうえで重要な存在である。直接の戦地となり続けてきた大陸側の経験も含め、戦火の中に逃げまどい住処を失う人びとの問題をも射程に入れることで、終戦という転換の意味の輪郭が一層明らかになるだろう。

ここで評者による「飛躍」が許されるならば、藤田省三による一九九五年の「全体主義の時代経験」（藤田省三著作集6）みず書房、一九九七年）への参照を試みたい。藤田はアレントの「二十世紀は難民の世紀となった」という言葉を参照しながら「政治支配における全体主義」を「難民」(displaced person)の生産と拡大再生産を政治体制の根本方針とする「ものと定義した。そこで政治体制は、常に新たな何者かを次なる追放の対象とする運動体であり、それゆえに追放を逃れようとするものの忠義

的帰属心の動員を可能にした。「追放と拘留の両極運動体」として戦後高度成長を経た社会を捉えようとした見立ては、本書では直接的な対象とならなかった、移動しなかった人びとをも捉える可能性を持ちはしないだろうか。

さらにそこから、戦後における移動の位置づけの解明も課題となる。戦後移民については、ドイツは戦後初期から南米への移動がなされているが、日本からの移動についても、戦後日本社会全体の変化との関係からその性格を明らかにしていくことができそうである。藤田の提起を参照すれば、規模が異なるとはいえ、強制送還 (Deportation) 体制の形成についても、この経緯が無関係であるとは思えない。吉川の言う「国民国家の時代」における大村収容所に象徴される、戦後東アジアにおける人の移動の質を決定づけた場の意味が問われるだろう。

膨大な知見と情報を含む本書を、評者の関心に引き付けてしまった面は否めないが、広く紹介することができて光栄である。著者らの達成に引き続き学んでゆきたい。

(A5判 vi+三四一頁 名古屋大学出版会、

二〇一九年二月 五四〇〇円+税)

(大阪大学大学院文学研究科准教授)